椿說弓張月

後篇 五

へ13
3908
11

門へ13
3908
11

鎮西八郎為朝外傳 椿説弓張月後篇巻之五

東都 曲亭主人編次

第廿六回

窮士雪中ゐ野猪を殺さ
猟師黒夜ゐ村酒を饋る

嘉應二年冬十一月下旬。為朝ハ密ゐ讃岐の松山を出く。肥後國へ赴たまふゐ。船をバ曩ゐ逢日の浦ゐ捨もたたまひ。人の為ゐ得ぬまつり。ろうて此度ゑ。志度浦ゐ便船しく。十二月の中旬ゐ。肥後國宇土郡。宇土濱ゐ着ひろう。あろうろう。宇土山とのふ高峯ゐ登りく。筑紫浮を見ろうさせバ。ちゝぬ火をらく見ることぞ。ふるる。ちゝぬ火しゝゐ。仲ゐ燃る。あやしたゆうろう。これ之亡妻の白縫姫のゐ少ひ生れく。懐妊ゐ堪ぬハど。九州ハむう。三年ゐ打経へく。兼化原田ゐ[illegible]

よろづ事の随に出ても入るにも。前駆後従の[illegible]に冊を桂
を料て炊ぎ玉を料て食ひ。富貴両ながら得たりしも。今は一炊の
夢と覚りて。かなはぬものは海山のみ。かくも遥か方はありゆくめるなど。ひ
と従ふものとては一條の杖一蓋の笠のみなるぞ。浦なく風水なるの羽音さへ。
なほ傷めざりしかば。君父の示現ありつく。この国へ来つれども。何地にか死
何処にかさだまるべくもあらねど。阿蘇の神垣ふかく。忠国かに値偶せし前象
もありしかば。此度も又[illegible]入るはじめなれば。彼神社へ詣てゆくさきのよも
神のちかひをうけまほしさに。宇土と託摩の堺なる。緑川をうち渡り。
東ぐちの里。莊の縣をさして。益城郡に入りぬるが。日もはや夕となりて天さへ
待険雪霏くと降るにか。寒さ堪がたし。されどこの辺りは。荒たる郊原
なく。小村はすこしあれど枯尾花の招くより外は宿借へき家もあらん。前面に高

く聳ゆるは木原山といへど何とかいふも。この秋白峯なる旅客がのぼる
る所とぞいふなり。さらなり志るべき武士の住居さへともえねものを今降る
雪の路なれば。跡なき所正しくも覚えるに彼は須利などいふぞわが
ゆくより先に。雪は次第に烈しく降りて面を向くべきに。
日もやや暮てゆくあたり[illegible]つるはじ。折しもあれ野飼の駒の呼ぶ声高
く聞えるはいとかしがましと馬どもの物に驚きさわぐとぞも何の
のあるらんと怪しみて。偉として立たれば。果して雪を蹴たてて。猛ひ
くるものありけり。近くなるままに熟見れば。その大きさ牛よりもいと大き
野猪の猟箭を負ひなるに。さるは野駒の呼ぶなるにぞあれにぞ怕れて
ならん。這何程のことかあらんと。そのまま押開きて待つかまへ
為朝をみるより大[illegible]小雉刀を押並べて[illegible]牙を噬返らし。

為朝
雪中ニ
野猪を
殺ス

針の逆ふまじきなれば迷さて。嵐高く吹ちらし。暮直とかんとすると。
爲朝内うちと矛を及うて。衝と後方へ六尺ばかり猪もとつて荒猪
を踏えしめ。やくふ既をめぐりしに。爲朝
やく足を揚て。猪の膳下と蹴る。蹴くまくみ〜怯むところを。雄
の嵐を押着つ。足を信〜踏ゆるとも。猛き荒猪の息北
よろ〜と果。苦痛の声とのろ〜もふ。ゆるぎ臥て息絶ぬ。偖西の木原山
の麓なる質木の戸を握りの。猟箭を負る猪夫嘴く走り来る。雪
あらはを爲朝を透し見つ。又猪の斃るを見えて。且驚て且歎び近く歩
ゆくといふ。もの見ん年頃。彼西の深山に分入りて。獣を射て捕を生
活とするのみ。目今この猪を射て。箭ハ二條負しゆゑ斃まじと。
あらけんと逆ひ来る。その勢ひ激しく。ちぐ〜遣り迫て。蹴血

を薬に追ひ払つるよれ。押て留めん者。昔大泊瀬幼武天皇
葛城山に御狩しくみづから荒猪を殺しまひしけんも。かくやとぞ思ひ只
盗ん。ふ嬬接姫を見ざるの紙。といふ。只管稱嘆して。如法夜のこと
うれしがるの相貌。そもそもと見えとる。声音を潜めげらと弱年なり。あるとき
爲朝に。猟夫ふ射ん。常言ふ。獣窮ることハ噪人窮ることを
盗むといふ。これ原本猪を殺さふ。彼ふ〜まろ〜斃まつり。
もろ〜をかく賞美せられ。又自湾するとハ。人の労を盗ひ。ぶ
膂力の剛なるあ〜ぐ。ゆ〜が猟箭の鋭きて。と回答なへば。猟夫ゆ〜
まさ〜嘆賞し。今宵えぐ〜ぞ。ゆ〜の力を借りて。これハ大なる益つをさり。
雪もいと深ふ。秀ぬ。ぐ家に歌し。集ぐ〜せるんといへば為教いみ。これハ
通宵立りく。火燭ぬ〜ゆ。好意ハ教へ〜けまどる。面りがく

と宣へば、猟夫はかの山にとゞまりぬ。こゝより阿蘇へは十二三里もあるべしとぞ。

老馬は郷里をしたふ心ありとかや。はるゝ雪は迷ひぬべきなれば、やがて家に駆りかへす。遠くもあらぬ山ぶしを為朝は鳥くゝびゆめえなれば、苗りあふ気色なり。猟夫既に苗め難く、腰より提げる瓢をとり出し、客人にいとゆゑんとすゝめ、この酒を喫へ。寒さ凌ぎぬべくとぞ山めぐりする人の綱なれど、半ばこゝろちくく猪を殺しもふ酬べし。野の花も却て蕨きさかあり。村酒も人を酔はすなり。あれぞ試みて進ぜんと信ずるこゝろ。木の下より流れる石の雪を掬ひつゝ、為朝は尻をうけ、その身もほとゝぎすの下より出づる金碗をとり出し、瓢の酒をそゝぐ。ちかくつひかく、蓑の間より、ゆりうる金碗をとり出し、瓢の酒をそゝぐ。ふうくく。只一口は喫まゝ。為朝は勧まゞ。為朝は遂に固辞を得ぬ。

[illegible]

謝しく。笠の紐を結びそえ異を後に去り去り。羊腸なる山あとゝろをこゝのふる酒の酔ひくく逆上る頻に瞑眩し。一歩は高く一歩は低く。踉蹌として足の皆とゝ為をもゝ。とは怪くもあるなり。僅一碗の酒ゆゑ酔ふ。ふと咳をつく。強ふ来んとしもよ。雪の中に埋もれる。絢索ふ足をもゝ。忽ち撞と倒れぬ。凡酔ふる人。下ゝび顛とゝたり。ゝえゝ起るゝ。ゝるぞ。その手ゝふ睡摶ゝ咍ゝるを。ほゝうう近き穂屋の中ゝ。庶の裘被ゝる女子。ゝゝ見ゝゝ。忙ゝく来ゝ出矢庭に為れを把ゝ押へ。犇ゝと縛ゝ。穂屋の真柱に結ぶ苗ゝ。ちゝんどもゝる釣い。酸酢ゝて泥のゝ。何ゝをも覚えぬゝど。且ゝくゝて己前の猟夫。彼猪を列卒縄ゝくゝちゝと拵ゝ。いと重ゝふゝ引揚ゝゝ。ゝゝ女子ゝゝ満火燭ゝゝ出迎ゝ。ゝぶ夫今宵ゝゝを獲ゝ行ゝ。

ちゝ〻ある面魂いかめしげなる。旅客を生拘もとり。彼うひ〳〵く辭さず。例の酒を飲〻〻。うへさま第一のふるゝんといふ。獵夫ゆき〻。うち点ぜつ。猪を門より引入れ臥しゐる釜をうえ〻。その妻よ對すゝいふゆう。嚮よりれ。この猪を整備さぐうしをとの男が行かゝりて。暇く打留たり。その為体物の用ゐ立べくええられば。祝ゝ例の酒を勧め。労をとゞて猪と人と両ながら。ゆ。山の寨よりゆさゝく。縁由を学え。あぐべをかゝらくぐ。子ハかゝ〻〻〻。養を被笠を戴き。夫婦後方先方ふたちく。酔臥る為釜を宙ゆ杠山路を登りゆくほどよ。いと深くこけ入りつゝふ鹿垣を結まゝ〻〻。棟高く建ながぐる。寨あり。けり。人迹稀なる深山邊ゆ似げなく。その為体山客の接〻も。うんえぞ。疑ら〻ハ世をたのぶ。武士の山賊〻〻。時をもつゆやとなぼし。

かゝて猶夫夫婦いる為釜を杜ゆ〻ゆをゝ。嚮門二ッぐうをゝ。書院めさる廣庭ゝれを引居夫ゝぐ裡ゆ入れ〻。早く〻〻出ゆゝその妻よいゆ。ゆゝ。ゝうゝぐ睡ら〻ゆ。ぐゝ見めうんと宜ゝぐゝ。いうふかゝゝ醒るべをゝと問ゆ。婦答〻。雪の中をゝもぐ杜ゆ〻ゆ〻ゝれが。今ハゝゆ醒る比及ゆぐゝれど。足公只今出ゆゝとゆゝが。解毒の一剤を用ひゆ〻〻〻ゝいふ。夫げゝと送ゆひゝ。懐中ゝう一包の散ゝ味をゝう出〻。覓の水を柄杓ようゝ〻。件の茶を為朝のゝふ任ぎ入ゝゝゝ。渇をゆふゝゝえゝ〻。弱ゝゆ〻喫ゆひね。借邪よ。もゝ容ある壯佞ホ三四人。燭を乗ゝ緑頬の左右よ對ゆ〻。主人の出る状ゝゆ。ほどふ年紀三十ぐゝある美女。長ゝの釜黒髪を。髻結際ゝ前ゝ。ゆゝ白綾の小袖三ッぐゝ状襲ゝ。綿ゝ袋

法衣を掛。唯みあへ白柄の雄刀を佩き。唯みあへ水晶の珠数を爪
繰。年齢五十ばかりなる大男の腹巻して。長巻なる刀を帯して従へ
屏風の後にうめき出て。床几に尻をうけ。生拘束なるかたのある欠と
いふその声玲瓏として。高かねどなる欠とふ驚を覚さ。ふく翔
たれかひとりかしひとりぞ縛られる。そもらへ何ぞや。と
潛に彼此を見くらべ。直と呆れてゆくすべ。遮莫かどうの縛を引
断離して。容易くもんまぶ這奴ぶせんやうをえどやとなげつ。つるく
よろづ且ぞ。改を低く一言もなの問せどそのとき主の尼へ向る欠に対ひ
旅客のべ驚をひそ全く叔害せんとあるぞ。豫て家隷夫婦
ののいふ命ぞ。物の用ようべくえもある旅客の禁をうるあんぶ酒に酔
しくとふ伴つるる。原来密ふ浅ふべきあんどあるう。さんど明白に山み
誘引ふたへ。その人。ふ賊ふうんと怕ひとびく後ど。のゆふ黙に中
ど子ふ人ふく。一方あへ毒ある酒を藏め。又一方あへふもあるを入れ。彼ぶ
喫ふんへ黙のにを塞ぎつて。情ふる酒を喫ふとその人あへ毒
ある酒を喫ふ。いふく砕ふく。潛みて〳〵荘のく来ふさて解毒の薬
を飲ふ。既に山ふべふ。ふ敢のの。二三十人に及べう。のふらいふ所をうんふ引べく
へ。縛をふたく。縁由を説ふらせるん。又兼引どとあふぶ。是非に及べど。
不便あべく。徒へ得ふそ為とそべられ。ふを定やく回養せうとひふこの
いふこと為女子あへ似べ。いと勇くゆえーふべ為敢ふもべ〳〵怪こと。ふべども
既を擡。熟彼尼をえのへば。尼もえとやく。為敢と面をあへく不審。
ほとり近くたりふる大男をえくり。彼男をえよ。近曾大嶋あへく自
害ふめのくりをゆえふる。曹司に事あへ違べ。いと怪〳〵もあへる。ふべ件

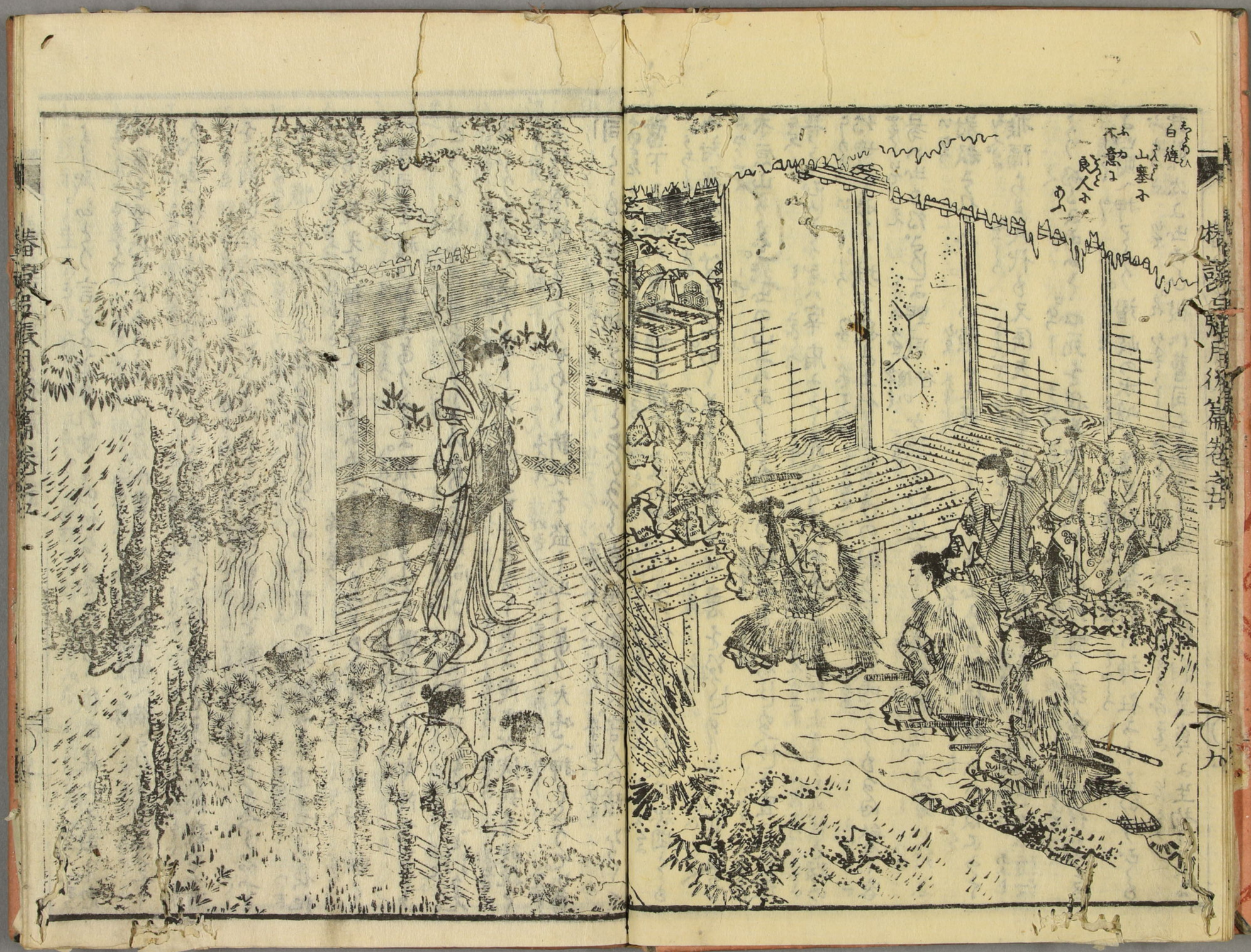
の男膝をよせ、燈燭を彼方に向げて曹司に告ゆとふ。為朝
は既にその人なるを知るゆゑ、十年おもひ惑ひつゝそこの何
秋、筑紫なる対死せり。白縫あんぬるぞや。彼は又八町礫こんるは僻目ぞ。
いかゝ為朝を見まさりやと宣ふまゝ。足目家隷ホ目。猛ヨ劇騒ぜさて
は曲口司なるゝ。おのれ。こゝ君とこそのうぶ。世ヨ存命のうぶ。
めとぶ。何疑ひなく付りなる。こは漫なり。こは物侍なるとく。且教び見しこと。
白縫は紀平治とくもふ慌忙つ。廣庭ヨ走りちりこゝぶうるその縛を解
捨ちゝ。壓うち拂ひ。聽なく上坐ヨ請ぜんが。猶夫目その妻目その形勢ホ
驚ち。呆ヨ面目なげヨ見えとうなり。

木原山ヨ亡妻亡夫ヨ遇ふ

第廿七回

盆城郡ヨ猛卒勇将を得る

當下為朝は白縫姫ヨ対ふ宜ふやう。保元の播乱ヨ又忠國とも
ホ対死ふと宣へ。かゝ悲なる。在せるヨ意を汲ぶ。ものとは。肥後乃
木原山なる。死出の山ヨ入あるぞや。ぶ縁故を説ふしめ。と宣へば。白縫
答ふ。ひとぶホは。宰府なる死べうし。又の教訓慈止ぶく。八代と鞍の
付婢を召ふく。城を脱ヨ出付ふ。考ふの射ふる矢は雨ふるもの目驚く。容
易ハ出も得ざるヨ。野冠（狼の谷）ぶ敵をかけちぶく。路を開ヨ。その方は終ふ
射殺されぞ。その隙ヨ主従いらしぶく。脱出ふれど。侍婢ホは彼方なく
推隔らヨ八代も又流矢ヨ命を隕し。ぶ目もと危ふ。紀平治が近江
なるヨあふく。必死を脱ヨ次の日八九人の結婢ヨ環會なく。主従なるヨ
ヨ四國へ押ふなる。讃岐の水崎ヨ隠ヨ住ひ。琴引の神社なるぞ。
武藤太ヨ出ふひ。彼は曹司を尋ふく。佐渡兵衛尉重貞ヨ生捕ふる


白縫
山塞ヲ
不動ニ意ヲ
良人ヲ

よりて。ようく言ふをあれ笑ふその仇あるをもうく。彼武藤太を教へ。忽
紀寛を雪ぎりて。ちうるふるのち後。曹司ハ伊豆の大嶋へ流されぬ。ふとゆくへ
ゐべ。そゞ紀平治を咎めのばしく。その虚實を窺へ。めくてゐゞ弟ハ武藤太が首
を齎し。侍婢ホをあく。茂光を追尚れ曹司を救ひ出し進らせぐうゆふを
めく。慨〳〵濱岐を旅さ。ゆ〳〵千貫の旅飯ふく追著。その夜紀
平治が茂光を狙殺んとるふあふく。主後のうもふ茂光を夜討ー嚇く
曹司を救ひ出ー。まりうるよ。誰ゐ賞物ふく。却茂光をうう
ゐなるを嘱ぶも及ぞ。ひくくものを責問ふ。曹司をば函をうえ。
径ちう大宰へ送り遣ーうとひふさんぐく。更ゐ茂光が伏兵を砂撓く
主後濱岐へ立ちう。ぜめく新院を盗く出ー。まり大宰へ押ちうて。曹
司ちうるよ。事を紀さぐやとちひゐぐ。直嶋の御所ハ家人の環なくて。

俄ーく近つをまりうぐ。さんバ世ちうく楫のうたちうようぐ弟ハ志渡ふ潮を
汲ふ。貝を捨ひ。紀平治ハ山ふ入りく。薪を樵ふ歳を焼ふ。ものもて。月
日を送り侍る。侍婢ホも四落八落ふなりうのくゆちくいく宿志を
遂るまう。時ふ長寛二年八月下旬。ぐ弟不思議ふも。直嶋の荒磯
ふ。新院ふ恐尺ーまり夫婦が孤忠を笑えあげく。ものくと勧めまりし
ぐど。諸ふ人ゐぐ汝夫婦が戒忠ハ。ぐ弟ふ後ふぞ報ふぐ。今ふ後。五
七年をまりく。かるくぐ為ゐふよあくを。志ふれぐも夫婦の縁ー。既ふ
絶ちるふ以ちうるぐバ。ゆくぐ合とりくるも。再び離れ。老ゐ偕ふ。穴を同ちる
ちう沢ゐぐ。ちれ命ふ。うやちうるゐを勢ふりくも。時を経ちく。面ふちう良
人ふ逢ハぐ。年来の憂苦を語り慰るのくるぐ。ゆうるるもあるべきぐ
と現示ー。生ちるぐ。魔鬼ふ入ちく。悪相を現ーゆひーぐ。ちう御魂の幻

に荒磯に出ましまさひしん。その次の日に新院は崩御ましましけるとぞいふも怪しく侍れ。かくて彼君の追福も三年が程は。志のかぎりに志渡の浦にぞゆかりある仏寺を営てありしが。遂に彼所にも住がたく。故ありければ紀平治等を伴ひ。潜に肥後国に立去り。阿蘇山に縁家を索侍る比。むかし宰府にて。又其国の政錯し。館に火を放ち腹切る。高間四郎が一子。太郎原鑑といふもの。猟夫となりて麓にありければ。ぞも名告あひつきて。その志も又の四郎に劣らざる壮佼なり。又彼所に侍る女子は磯萩と呼る。年来ここに給仕せし。女の童に侍り。曩に縣の侍児は。その外に疎くありけれど。彼もまた雄々しく忠義抜群のものなりければ。母も立去ることをゆるさず。ここまでも従ひ来りしかば。この縁を高間太郎が妻となして。彼等夫婦をば麓に居らしめてありと

ある旅客に。勇く見ゆるものありしが。嚮にやけるぞ。賊ことごとく[illegible]山中の桟道を告ぐ。それを捐がたし。兼て聞ざる其は備へありといへども不便なりかうしなど従り。そのうちに。縣の勇士を集合て。その日の夕暮に推渡り。敵を迎へて奮んとするの外。他なりし。ある時に曹司は何なる四月下旬。茂光等に攻られて。館に火を放。自殺をあひぬと聞えて。一旦は年の宿望むなしくなりて。朽ましきも悲しくも。比ぐらひなきものなかるべし。よしや万里の波濤を隔つとも。顕身の息の内も。天ゆく夜間の月をば見ずある日なかりしに。今ひとへにこの死なで。けふまで生たるかひなきは嘆かはしきと今さら恨み悔も。果敢なくて。ひとつの憤の遣るかたなく。遮莫工藤茂光こそ夫の仇なれ。せめて彼が首をとりて。亡夫を祀り進らせ。妻は自害せんや。とおもひさだめつ。髪を剪て。世をすてし志を示し。形は女僧に似かれども。

神八幡羅の街より呻吟まとく高間磯萩ふ催促しく。諸方の勇士を集
ちらぶ。四～二三十人より及べり。今ハいつちぐの期をぐさ。翌ハ東へ戦をとぐ～
とく。紀平治ホとそのうの武示～めに。あつくふ初装を整ふ。ひど怪さハ。
疇昔の夢ふ年紀三十ふちうを婦。忽然ととくハ拗方ふ立在君ふ
非恋～とあほとその人ハ翌立の夜ら～へ非ふ東へ旅ちうのハ。ひひ
とぶまりぬくとしのふうぐ彩ふ。そもれ。何ぞうり彩ひつると問ふ。
彼婦答ふ。うを消とゆうふ失ることりくハ。夢覚ちく。拗方を見えず。
嶋絹ふ揍揃ちる袿の鮮血ふ染くること。ちまくしさ髑髏ありふの為
侍友ふるべくとふ程ふ。天の明ちもちて。紀平治ホをちびいぐくとの愛を
行さすちふ衆皆ちひ惑ふのくあくそれとちふのもの。ひ～ちるふれ曹
司。ぐちちぐも今齊ホをちるの愛の告ふ違ちど。ひく環會ふあとそ。

ちハ併新院の宣ひたひしひふ。ひあちされ行ととく。十年ふ
あちる憂ちの一六一十を告ぬくバ。紀平治ハあちるの鎖しさ。不学ふ蔬
ふ。ひ～白雉姫のひひ偏ら～ぬくを。彼袴り慰ふ。ある間ホ示ハ機萩
とちふ廣縁ふ拝伏～。保元のむひハ僕ぬやく八九歳ふ。れ曹司
を恐ちく～ど物倖ちくふ縛ちく。罪を猟ちく。ホ。預くハ寛仁の
制度をとりく。旅～ぬ～ぬ～ふとちふぞ。ある紀ハ高間を熟齋ちく。法られを
ちまちつや。と宣ひく懐中ちう割符を出ちくえぬくバ。ある間ホ郎ちを
ちと驚ち。とハちの秋僕白雉姫の代ふとちく白峯ハれ墓へ詣～とを。
ふの山ふく。旅客ふ遍ちる割符こさ。ハ。その時の旅客ハれ曹司ふく
在せ～詠。ある面ちる。野干玉の闇ちりくぬ。て～へ使ひ進ちせるぐ。面
忘ちとちて託ちけとちく頭ふ汗～く後悔さ。ある紀のさねとられ

この秋白峯みくに行よりけらまたくる日ハ既に必死を究めれど汝が人
をもるこの怜悧に愛で。假にこの割符を受しめ給ふ。とれぞ〳〵みく
環會ゆゑ主従の縁〳〵なるべし汝の縛らまさんに終に白雞ふ
あふ〳〵なるべんかるべきも恥るこのなれと仰く却る間磯萩
を賞美し。又白雞紀平治が年未の若節類忠を稱賢し。白
襦の袂中に沿らし袴と髑髏をもつて〳〵とれをけ〳〵ことなひ
給ふ。怪哉〳〵宮ゆゑ。とへ疑べくもあるぬ。彫像が袴ぬ。とれを
この髑髏も彼が白骨なるべきもの。頗ふ嗟嘆し。白
紀平治ホハさ〳〵高間夫婦も不審〳〵。彫江〳〵宜しへ。行
人のるふやと問ふ。為朝答〳〵とれハ大嶋の主管ふ。三郎忠重
とひ〳〵ふ女児みく。その志信ふ父ふ似ざるの十年がうと。
これふ給ふ〳〵。為頼朝雅。嶋君と〳〵る子ども三人ふ〳〵産せる側室。
ぬ〳〵ちに〳〵。〳〵大島みくの首尾を審ふ物ふ。又ふるちゆの鬼が島へ渡し
ふ。鬼夜叉ぐふ。長女ぐふ。太郎九二郎九の〳〵ハ〳〵。為朝彫江鬼夜叉が
大嶋みく自殺〳〵ふ縁由。又ふ〳〵ども。未だ〳〵退を〳〵。〳〵ぶめて妻子の死
たる〳〵ちゆ。大ふ後悔〳〵。直ふ嶋君を刺殺〳〵。後ふ〳〵腹を切らんと〳〵ひ
るふ為朝彫江が幽霊長女が親族ふ。四男五郎とひ〳〵ものを〳〵〳〵〳〵
〳〵ふ免さ〳〵れば。其ハ〳〵〳〵自殺せるの〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
本島へ〳〵。長女と二人の子どもふ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
遂ふ讃岐へ押渡〳〵。逢日の浦みく。大宮司季範ふ免告あひ。とれふ
托〳〵嶋君を尾張の熟田へ却〳〵次の日新院の御墓へ〳〵清〳〵〳〵
年の孤忠を祈〳〵。既ふ自害せんと〳〵刀を持〳〵れど猛ふ足離麻れ。

肥後なるその中ふ妻又の亡魂幻よあらはれて。外ながら自殺をとゞめ。冬の夾ふ至りバ。肥後へ赴けと宣ひつゝ。或ハ兄利茂康が弟黨紫田時貞とゝふのの。密やふ大将へ使ーす。朝雅を下野へ迎とりて。すぐさまに。物さうぬふ。紀平治。高間。俄藪ハ。ゆゝしの毒ふ噴賞ーし。白縫姫ハ殊さらふ或ハ泣或ハ歎び。為朝の純孝。熊江長女が善節。見夜又ゞ去死をいと惜ま。朝雅ゆ君を弟九二郎九の猛ふ孤とする。哀悼ふ。為朝ハ。又忠國以下八代ホゞ陣法を良ま。野風が死をのゝ。まふ。忘れ感激ーし。琉球まゞ索ゆたゝ。上皇へ献ゝ。鶴の不忠浅ふも大将へ報ゝ。ゆゝ。白雉を世ふ。ゆゝ人とものひ。白縫ハ又ゝれを。死とりと。ゆひもりハまゝ。至ゝん二世の契りゝるべーと宣ひつ。夫婦君臣の會話を庭の白雪ふ。ゆゝ。長き冬の夜も明ゝん。

ゝる初ふ。高間を引ふ誘ゝ。山塞ふ留りたる勇士ホハ。ゝゝ。平家の悪政を疎ゝ。為朝の智勇を景慕ゝる武士の浪人ゝりゝれば。曹司ハ不思議ふ。殘ふも存命ゝ。ゝふ。ゝゝ。大ふ歎び。紀平治とゝる間を平ふ就ゝ。ゝゝ。見ゝ。そのゝゝ白縫ハ。髪を結。袈裟を解ゝ。賀慶の遊をゝゝ。夫婦主従ゝ。ゝ。ゝ。枯ゝる枝ふ春の花開海月の骨ふあふゝ。十年あゝの艱難憂苦もこの一會ふ忘ゝ。

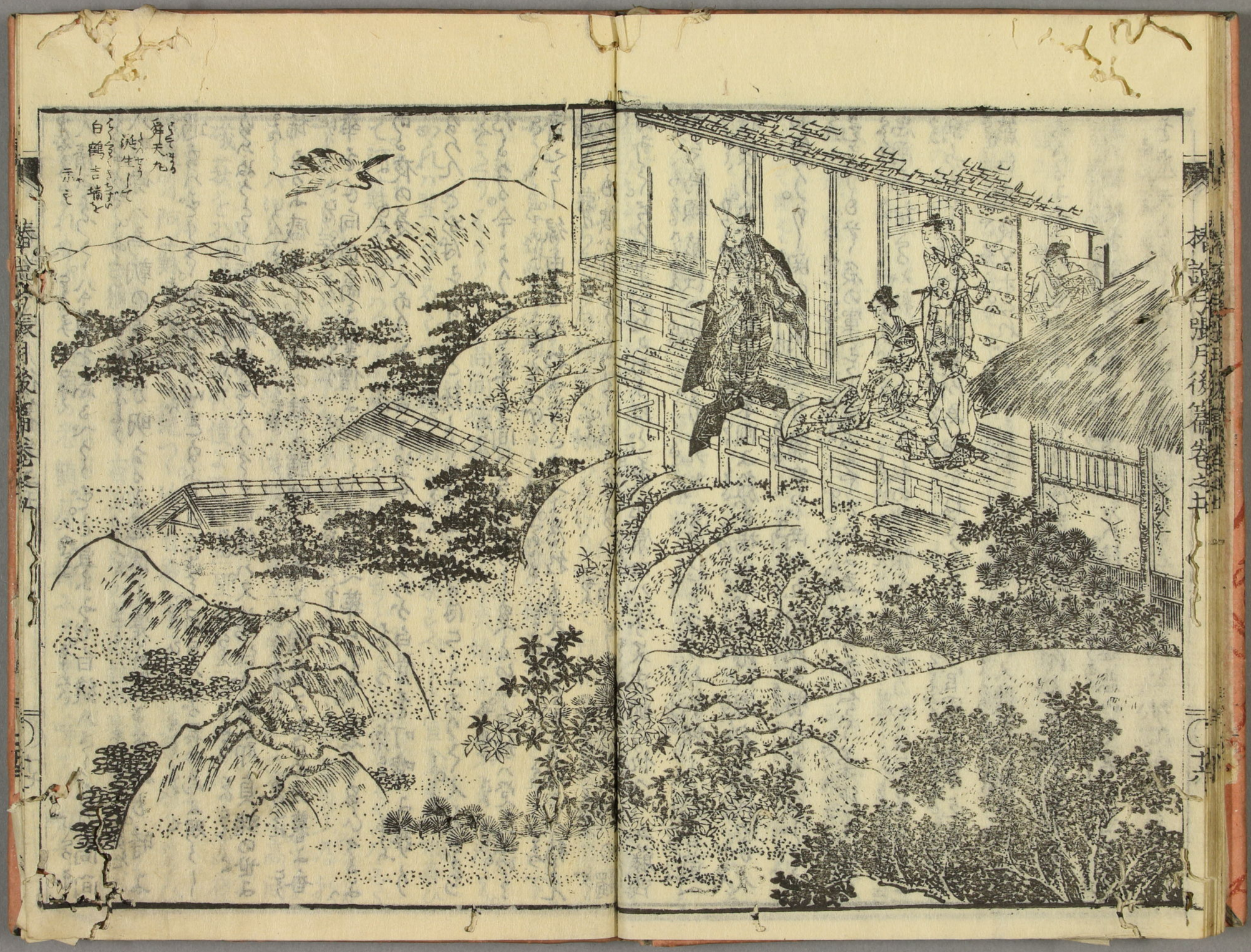
第廿八回

白鶴瑞を呈して舜天降誕を
赤心神ふ禱ゝ朝雅起程を

次の日。紀平治高間を郎ホ。為朝ふ。ゝゝ。身方の勇士。ゝ。二三十人ふ過ぎとゝ。君既ふ。ゝ。百萬騎ふも拐ゝ。近相夜ふ紛ゝ。原四が賊を乗ゝ。九州の武士ホ。陳ゝ。この狂

八ちうね。舊好の郷士。農民に至るまでぐ。拓うどーく馳来うん。かくう菊池を攻潰して。肥前肥後を畧し。遂に羅大友を攻落して。國司を追出し。太宰府を根城とせば。九州一挙ちく定りつべし。ちうしば官軍も怕ちるに足らず。平家も屑うんぐ。君又の為ゑ保元の寃を雪め。自己の為ゑ多年の鬱恨を散ちる是まり。ちくちひちちゆくうしと勧れば為れ荅ち。汝違がひ云ちく。今九州を攻ちうんいと暴しうちうそも。新院既に崩ぜるし。重仁親王崇徳の宮一の宮出家しちふなれば。誰が為ゑ蝸牛の角目ぐちそ。國を爭ひ。人を暴う。太平の世を乱ちぐを平家へ従来の仇うれども。道を虞に貸ゑゑうどいうちうとれを發んぐ只時を待ゑゑちうどうれちこぶ榮利を圖ち。ぐ各の軍兵を動し。罪なき民を殺ちる怨びぐ。宣ひる。時に白縫夫のほとりゑゑ。つきとうれをゆち。ちうん女子ろ

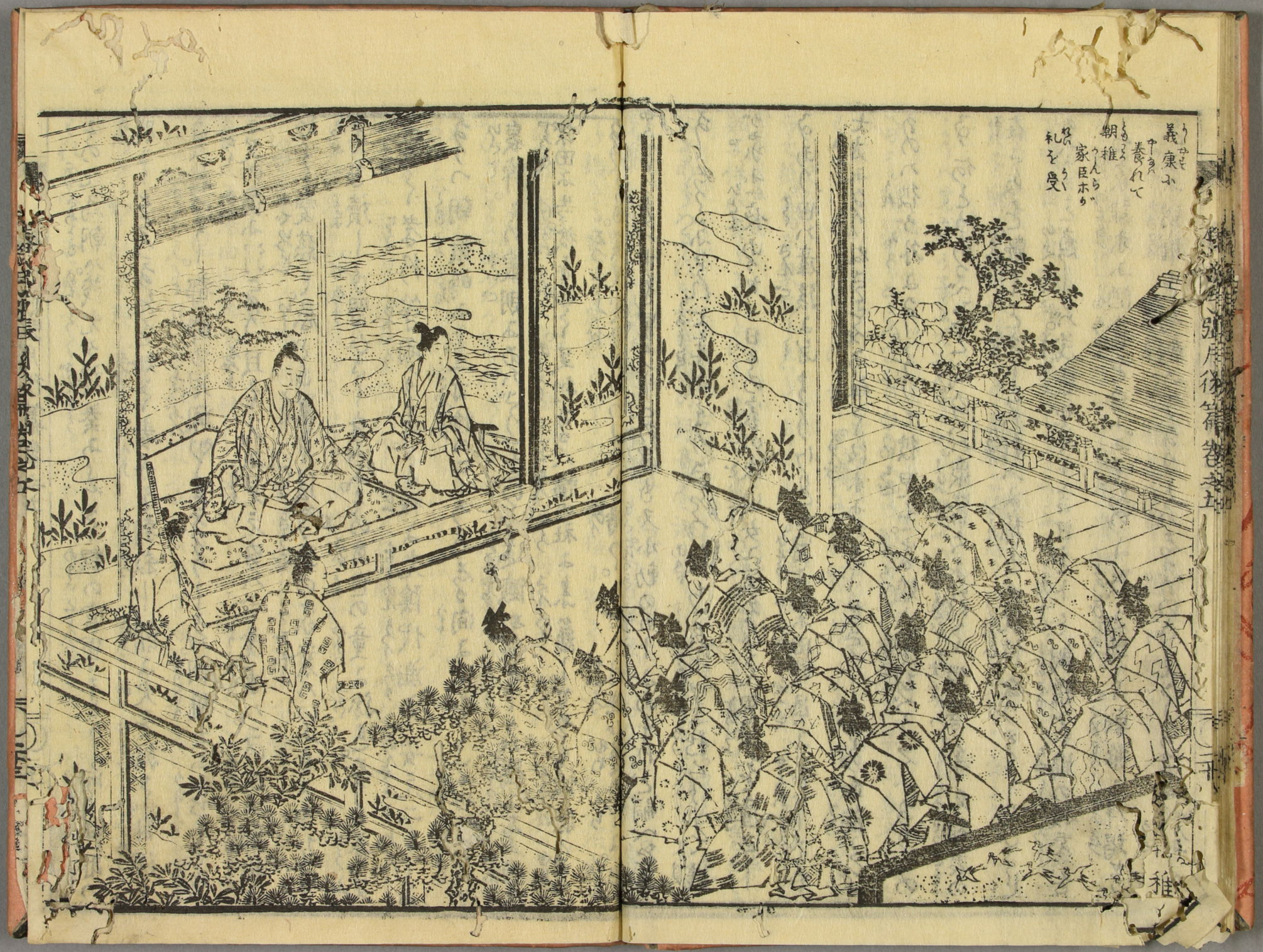
ゆゑちうちくやべたゑゑねど。菊池原田ハつぶ又忠國の仇ゑう。工藤茂光ち為頼能江の仇ちうの。九州をちじとちうば。船路ちう伊豆国へ推渡り。茂光ホを殺ち。東國に旗を揚ぐ。彼地ハ源家譜代の家人ゑゑう。関の八州を打靡ぐ。両の九箇國に勝うちんぐ。各の軍ちと宣ふゆ。と問に為朝ちうねく。菊池原田が忠國を討ちるハ勅命を稟ち。私の遺恨をちうせり。かくまば是公道に捐ふゑゑり。ゆ又茂光が為朝をねくちひち。官軍を稟ち為頼能江鬼夜叉ホちれがゑゑ自殺ちとい。ぐとれ又茂光が私に征伐ちちるゑゑあぐ。さるふちうち。これ茂光ホを拒まぐ。を来て死をちちゑハ朝廷を重ぜる家に。只憎むべたれ。清盛が暴悪のに君を若り民を虐。天と人とに其ハに怒る。うん時をちうち。これをゑんぐうどーも


椿説弓張月後篇巻之中
三十六
舜天丸
誕生して
白鶴吉瑞を
示す

人情にあらず。公道を忘るべからずと宣ふにぞ。白縫はさらなり。高間
八町礫は。為朝の義理分明なるに感伏し。寔にかゝる英雄も。時に
遇ざれば忽しかり。朝猷と呼れたまふことさよ。月日はわが君の為に照らし
給はねかし。頻に離息をつきたる白縫は。又彰江が苦節貞魂の世に
稀なるに感嘆し。紀念の桂に髑髏を裹て。祠堂にをさめ。旦暮に香
華をも手向。道高き聖僧に託して。其場へ葬らばや。といひあひたるに
ある夜の夢に入りて告やう。我が白骨を叮嚀に葬り
なさんとおぼさるゝ。いと歓しくは侍れど。この所にありて人をまもち
給ふなる今より五七年が間は。はぢめ事しあるべしといふ。白縫は覚て後いよ
斎之して縁由を為朝に告させ給ふに為朝も又訝しくぞ
この髑髏がかくまでに見えぬるさまなくと仰せしかば。白縫は件の髑
髏を葬らず。その祠堂に秘おきけり。かくて詰朝為朝は白縫に宣ふ
やう。そも近曽この国へ来つるとき。阿蘇の神社へ詣んとて。その山下
を過り。ふしぎにも高間磯萩に導れて。夫婦再びあふことを得たり。
されば翌はつとめて阿蘇へ詣て。志を果すべしと宣へば。白縫姫喜び
て。阿蘇はわが為に産砂におはしませど。とてもに山蟄しては。なをさく
一トたびも参らねど。その序にまゐらばやと倶しぬべうしと回答なる紀
さらば伴をるべきと諾て。紀平治ら二十余人の勇士を山にのぼらせ。高間
磯萩を招て。夫婦主従僅に四人。十三里を只一日にゆきつきて。その夜
は通宵阿蘇の神社に籠て。次の日。夜をこめて木原に帰りぬ。その日
より。かゝる白縫はこの月より有身て。次の年の秋の季に男子出生す
この児生れながらに丹頂の老鶴。屋の棟におりて。啼て

南を望て飛去るね。ちいとめでたを祥とすべ。衆皆久後のり
とろがざるのもの。されば為朝ハ曩の新院の宣ひ志しのつきを
さ。ちひあふーのひとのぶ。白縫紀平治が外ハ。ひもちろーのハど。
児の名を舜天丸と呼く。紀平治をのく。傅き養育しのひつ。元
年の末系山といふ。益城郡の属しく。四方ハ茫くる郊原なり。
南のうく五家の隣て。白山樅木。奈須の連山波濤のごく立り。西ハ
亦八代郡の隣て。川田種山隈川あり。乾のく薩北郡を限りて。
水俣。袋國見山の外御くる蒼海あり。うりて為朝の木原の山中の
躰住のふーてゞ原田林の徒もろどの水俣濱村の漁夫ホのく。
のふーてろりうん。二十里の隔る路を。遠ーとせどを。甚甚
をわく木原の村。舊恩をもの山を。信ゆうのーうゞ為朝主従ら。
深山の住ひて魚類海藻ホをーうく。どかつーゞ鹿ハ刀を揚く
耕ゝを戈を植て。耘ゝ山畑野。衣食の利ハ充りける
されば為朝ら。の山の木のひーにうく。飛雁碎て。峯上をろく。これ
勇將の強ちハ怕ろりの狩。今もうはろうをの。世ホ系
山を。びく雁回山とも。ろ天とゞ雁。ら。の山を凡ろハ喻ゞて
ゝ。ゞ又山中の為朝の寨せ。礎殊ゞ。土俗ハ為朝の城迹とぞ
ひろる。彼地の狂ぶ人ハうるふどるべ。是ハさてろを。梁田時員ハ
去年嘉應二年四月下旬。伊豆の下田浦ホ。為朝の音つゞを結
ホ朝稚不思議ホ。紙鳶ハ乗うゞ。悉ろく。彼浦へ落ひ
いゝ。ふく。称ゞく。暗号の狼煙を揚。ろうく朝稚を脅ホ
夜を日ホ継く。下野へ立ろう。主君足利義康ホ為朝の

一五一十演説し。彼人らの贈るところの瑠反の短刀を進ぜ、朝稚を
誘ひ、来りしかば、中せしかば、戎康驚き対面し、為朝の節義
と嘆賞し。且朝稚の恙なきを歎びぜえ。此度家隷時
員を、蜜に大嶋へ遣しぬ。為朝の消息しに、ものを通ずるなり。けの
うは戎康、子みておはするか。と宣へば、朝稚はそでをもて又の恙なきを
見て曰く。なるほどのひまなり。かりせば親胞兄弟の暇を
とぐるしかるべしと。顔を又の怒の甚しきに。罪なきものを
こそ。紙鳶を乗せまつる。なほもなほ侍曲を落さるるなり。盗
賊よ。伴ひまつるべしとのたまひしかば。気色を
なほあらつてとぶ。戎康の好意を謝して。礼儀正しく送りぬ。
戎康はもとの令剣を摘賛し。次の日悉巨をはびつどくの宣ての
ままに妻に世を早うし。この頃又小動の五十ばかりあれど嗣べき子
なければ。秋ちかき小男を狩りて賤
しき女にひとし。男子を産ま
るあり。母は産後の身なれば。富は梁田時員に養はれ
七才になりぬ。さてぶん恥ぢ。汝ホハ右衛門ぜざりしが。血筋なる
ものは彼が外なし。ようて彼児を。家嫡と定むべきなり。ものうらの
ありとあるべしと。同のくば。衆皆大に歎く。僕等。年来稚君の
在さねを歎くこと久し。ふ形ふる稀なる僥倖なりとぞ。ひとし
めうと意しぶ。戎康ぜざり。吉日を卜て。朝稚を嫡の披露を
し。家隷ホホ酒食をのみぞ。めでたく教を述べ。朝稚は拝謁せ
ばぶ朝稚を。今朝の子なりしと。ちるのくえくるの


義康ハ
中多ク
養れて
朝稚
家臣ホリ
礼を受
稚

わかく。密かふ旅ゝちなく。いとまなくつなくハあるとど。神の道ゝ
てが恙なくるべーとく。汗ーなひつ。一口の短刀を朝稚ゝ与くとこれ
ゝ来なひつるとく。為朝の贈来されーのなれば。此度の餞別ゝ進ふ
ゝるゝ。ゝーや簾にとゆゝんが。存命さゝあり。今ハ七八年を経
ゝ。互ゝ面忘ゝるゝなもあり。ゝんゝるゝとのゝゝゝゝの短刀ゝ
ゝゝとゝめゝ。ゝく旅の准備をゝゝと。ゝゝえゝゝーなひつ。猛ゝ
時員をゝゝく通路のゝゝ。ゝゝゝづ意を汲さー。路銀をーかゝぞ
遍ゝーなゝば。朝稚ハ養父の賜を拝受く。階ゝ彩装を整ゝ。裳
をつゞ彩笠をゝくゝー。時員ゝ。足利の館をゝゝび出さゝ竹
地をゝくゝ也ゝゝく。まづ彼幣を立く試ゝなゝ。幣の路西ゝ
ゝゝ剣ゝゝ。ゝゝゝば西国へ赴くべーとく。中先道を上ゝゝゝゝ
後ハ街西岐三岐ゝゝゝく。ゝひゝゝゝゝ毎ゝ。幣を立く郷道ゝと。
山を踰海を渡ゝ。夜ゝ宿ゝ日ゝ歩く。主従後ゝゝゝ先ゝゝゝて。
ゝゝとゝく程ゝ。ゝひの外遠く来く。豊後と肥後の堺ゝ。宮原
とゝゝ田舎をゝゝゝ。ゝの地ハ。豊後の直入郡ゝ属ゝく。肥後の阿
蘇と堺をゝゝゝ。此地の街道ゝれど入江ゝゝゝゝ。路経を堰ゝゝ
く。荻藍のゝく横ゝ。憩ゝゝた蔭ゝく。宿賦家ゝゝゝけり。